

オムロン基金研究プロジェクト2012年度最終報告書

グローバル時代における企業のSRとビジネススクール教育の新展開を求めて：(初年度事業として) (グローバルコンパクトを中心とし) 日本・関西・京都からの国際的発信力の強化を目的とした、研究・教育のための企業連携、国際連携の構築

研究代表 ビジネス研究科 近藤まり (研究代表者名記載)

1) 活動実績

申請書に記した際の目的は、以下のものであった。

- ① GCJN (グローバルコンパクトジャパンネットワーク) との連携を図り、ビジネススクールとして、企業との連携を深めるとともに、長期的に大学メンバーとして果たせる役割 (研究、教育など) を模索する。
- ② ①の活動を通じて、日本を中心としたCSRの最新動向についての整理、研究を行う。
- ③ 日本国内、そして、海外において、学会や国際会議を通じて、研究者、企業・実務家への発信を行う。(京都、アジア、欧米)
- ④ アジアのCSRのデータベースを整理し、日本とアジアを結ぶ。
- ⑤ GCやPREMの精神にのっとったビジネス教育についての方法を研究する。また、そのための、国際的ネットワークを構築する。
- ⑥ 上記活動を通して、同志社大学ビジネススクールが、日本における国際的SR教育の一拠点として成長するための組織的、また知的な基盤を築く。

上記のポイントについて、以下のような活動を行った。

- ① GCJN (グローバルコンパクトジャパンネットワーク) との連携を図った。
 - GCの年次総会の後に行われる、年一回のGC会員向けのセミナーで、モデレーションを行った。
 - 日経フォーラムでのモデレーションも行った。
 - 2月には国際シンポジウムを行い、GCJNの全面的なサポートを得て、長期的に大学メンバーとして果たせる役割 (研究、教育など) を模索した。
- ② ①の活動を通じて、日本を中心としたCSRの最新動向についての整理、研究を行った。
 - 例えば、GCの年次総会後のセミナーでは、日本のCSRの最新のトピックである、人権とCSRについて考えた。

- また、日経フォーラムでは、アジアのCSRの最新動向について整理した。
- ③ 日本国内、そして、海外において、学会や国際会議を通じて、研究者、企業・実務家への発信を行う。(京都、アジア、欧米)
- 海外の学会での発表を行った(ボストン)
 - 海外のCSRの国際会議で、発表を行った(バンコック、アジアCSR会議)
 - また、上記の国際会議に、GCJNの参加を促し、グローバルコンパクトジャパンの発信力にも貢献した。
 - 国際シンポジウムを行った。
- ④ アジアのCSRのデータベースを整理し、日本とアジアを結ぶものを作った。
- DBSグローバルMBAのテストサイトにおいてすでに完成している。
- ⑤ GCやPREMの精神にのっとったビジネス教育についての方法を研究し、また、そのための、国際的ネットワークを構築した。具体的には、
- 国際シンポジウムの開催
 - GCJNとPRMEの後援を得た
 - 国際的スピーカーの招へいとセミナーの開催
 - 国連PRMEのヘッド直々によるセミナーの開催
 - フィリピン元教育大臣によるセミナーの開催
 - PRMEに深くかかわる学者によるセミナーの開催
 - 国連PRMEの第3回アジア会議(慶応で開催)への参加
 - ◇ アジアおよび当校の事例についての発表を行った。
 - ◇ 学生のケース発表-国際CSRケース発表大会で2位に輝いた
- ⑥ 上記活動を通して、同志社大学ビジネススクールが、日本における国際的SR教育の一拠点として成長するための組織的、また知的な基盤を築く地歩固めに貢献した。

その他の活動

- メンバーの一人であるグスタボ タナカ教授が、タイやペルーに行き、途上国のSR教育や、CSRグリーンアカウンティングなどの視点から調査を行い、比較研究を行っている。

なお、当初予定していた企業メンバー(GCJN)も海外メンバーも、すべて会議ないしはセミナーに参加した。

- Daniel's College of Business, University of Denver
Cindi Fukami, Bruce Hutton (Former Dean)
- Asian Institute of Management
Francisco Roman, Maya Herrera、Edelwardo De Jesus (President)

2) プロジェクトから得られた成果

申請時には、長期的目標として以下のことを考えていた。(詳細な成果物に対応する目標は、次項の(3)に述べる。)→が成果である。

- ① 日本を中心とするCSRの最新動向に関する整理。アジア、欧米との比較、位置づけ。(国際的発信力をもつ学術論文の作成)

成果

——>すでに複数での国際会議での発表を行い、また行う予定であるので、着実に前進している。

- ② グローバルコンパクトを中心とする企業と大学(教育)面での連携のモデル作り。(日本のビジネススクールとして最先端を走る)

成果

——>協力関係について、2日間の真剣な議論を重ねた。

——>PRMEの国際会議に学生が参加し入賞するなど、日本のビジネススクールとして最先端を走っていると考える。

——>NYの国連PRMEのヘッドが、当校を訪問しセミナーを開くなどは、当校の努力が認められている証拠である。

——>2013年にはGC関係者によるサステナビリティ関連の授業の担当も予定されている。

- ③ 今後の研究・教育・企業への還元を目的とした日、欧米、アジアを結ぶ世界的連携の構築。

成果

——>日本国内での連携(慶応、GCJN, など)

——>欧米(イギリスブラッドフォード、アメリカデンバー大学のビジネススクールとの協力関係)

——>アジア(アジアCSR会議を開催し、次回のPRMEアジア会議を行うアジア経営大学院との関係、マカオ大学との関係)

——>多国籍の学生を巻き込み、世界的連携が構築された。

- ④ DBS全体の研究力、教育力、社会貢献力の高上。国際的競争力の獲得。

成果

——>上記から、当然、研究力、教育力、社会貢献力が上昇し、国際的競争力が獲得されたと考えられる。

3) 成果物 (出版物、研究発表、講演など)

① (申請時) グローバルコンパクト参加企業を中心に、主に日本企業 (または日本との比較の視点から切り取ったアジア) のCSRの最新動向を研究し、論文ないしはモノグラフとして、英文でまとめ、発表できるものを作る。本プロジェクトは、初年度ということで、とりあえずは、国際学会で発表できるものを作ることを目指す。

成果

→ 例えば2013年にRoutledge発行予定の*CSR in Asia*の編集者 (Kyoko Fukukawa) がシンポジウムに参加した。また、その寄稿者もシンポジウムに参加し、今後の研究の成果に大いに役立った。

→ 国際シンポジウムの成果は、国際学会で発表された (2013年4月)。応募がシンポジウム前であったので、ポスターセッションにまわることになったが、今後は、さらに論文での発表を目指す。

② (申請時) Asian Institute of Management が主催する Asian CSR Forum (アジア最大のCSR会議、10年間にわたりアジア各国で毎年開催) において、日本のCSRとしての発信を行う。

→ 日本国内だけではなく広くアジアの学者、実務家、政府関係者へ向けての発信、研究の還元。日本のプレゼンスを高める。

成果

→ 発信を行った。

→ また、GCJNの研究メンバーも発表を行い、日本のCSRの発信を行った。

③ (申請時) グローバルコンパクトと大学 (ビジネススクール) の連携プロジェクトとして、シンポジウムを行う。

→ 日本企業や社会への国際的最先端の知識を連携により提供。

(アジアのCSR事情などの知識を日本企業へ共有など)

成果

→ 国際シンポジウムを2日わたり行った。プログラムの中に、アジアのCSR事情の項目も入れ、日本企業へ知識を共有した。

④ (申請時) SRビジネス教育法について、日 (DBS) - アジア (AIM) - 米 (デンバー) - 欧 (Aart, Tübingen) を結ぶような活動を行うためのコミュニケーションを行い、なんらかの形で発表する。(セミナー、ジョイントペーパーなどの形が考えられる。現在、デンバー、AIM、DBSでは、Academy Management Learning and Education 誌へのジョイントの論文発表が構想されている。)

→ DBSを中核に欧米アジアを結ぶ世界的ネットワークの構築。今後の研究、教育の基礎となる。

成果

→ Tentative に参加の可能性があるとしていた、Aart University (Finland) は、University of Tübingen (Germany) とは、会合を持ったが、お互いがやろうとしているプログラムの時期的に合わず今後の協力を約束することになった。それを補う

ものとして、イギリスやマカオの研究者とのネットワークの構築ができた。
→シンポジウム修了後、今後の連携活動について話し合いをし、構想を練った。
→まず、シンポジウムの成果について国際会議で発表（デンバー、2013年4月）、
→論文を国際会議で発表（日本、2013年5月）が決まっている。
→共同執筆が現在進行中である。

⑤（申請時）大学の国際連携による貢献として、AIMの協力のもとアジアのCSR事例のデータベース整理を行い、日本企業がアジアや発展途上国でCSR活動を行っていく際の参考にできるものとする。
→日本企業・社会への貢献。（特に日本企業の新興国シフトが高まる中、重要な情報となる。）

成果

→データベースが完成した。少しバグを修正し、2013年5月中には、グローバルMBAのホームページにあげることができると思われる。このデータベースの話は、日経フォーラムなどでも取り上げたいと口頭で申し出があったりしており、今後、日本企業・社会に大いに役立つと考えられる。

4) 申請書に記述された内容と成果の比較（達成度についての自己評価）

申請書に記述した内容と成果を比較すると、ほぼ、すべてが達成され、また、当初、思っていたよりも大きな成果となっている。

以下は、当初考えていたよりも大きな成果になった部分である。

- NY PRMEのヘッドとの直接的コンタクトがとれるなど、思わぬ広がりをもつこととなった。
- 多国籍の学生を巻き込んで、教育面での拡がりもでき、新しい形の教育を模索することができた。
- GCJNとの協力関係の構築が、大変深まった。（代表理事との関係の構築、GCJNとの国際会議の参加、GCJNの鍵となる活動への参加、授業への協力の構築）
- またGCJNから、その他の企業との関係も深まった。
- 新たなメンバーによる研究活動が始まった。これは、ラテンアメリカも含める調査である。

オムロン基金研究プロジェクトの支援がなければ、このような大きな成果は得られなかった。ここに研究プロジェクトを代表し、心から御礼を申し上げたい。